

ITL NEWS

RITSUMEIKAN UNIVERSITY INSTITUTE FOR TEACHING AND LEARNING

立命館大学 教育開発推進機構 ニュースレター



学生の成長を可視化する 教学IRと学びの実態へのアプローチ

鳥居 朋子 教育開発推進機構 教授

▶ キャンパスになじみながら成長する学生たち

この原稿を執筆している11月中旬のいま、キャンパスを彩る樹々は錦秋のときを迎えています。季節の移ろいとともキャンパスにどことなく落ち着いたムードが漂っているのは、学生たちの佇まいの変化と決して無関係ではないように感じます。4月には風に揺れる若葉のようなあどけなさやごちなさをもとった新入生たちと、かれらを迎える上回生たちが醸し出していた独特の雰囲気は、いまは薄らいでいるようです。あくまでも印象に過ぎませんが、これも学生たちが大学というひとつの公共の場になじんでいることのあらわれではないでしょうか。

おそらく、個々の学生の内面では、驚くべきスピードで「成長」と呼ぶべき変容が進んでいることでしょう。近年重視されている大学教育の質保証の課題のなかでは、学生の成長のモニタリ

ングとして、とくに学習成果の可視化が注目されています。これは、一連の学修が終わった時に学生が獲得した成果を初期の目標に照らして測定する営みです。こうした営みが基礎となり、いわゆる内部質保証システムの構築を進めていくことが認証評価機関からも求められています。また、説明責任の文脈においても、2011年度から大学における教育情報の公表が義務化され、「大学における教育情報の活用支援と公表の促進に関する協力者会議(中間まとめ)」(2011年8月)をはじめとし、大学の教育情報の活用支援にかかわる検討も推進されています。これを受けて、各大学では、3つのポリシー(ディプロマ、カリキュラム、アドミッション)の策定を経て、それらのポリシーに照らした成果の挙証をデータや情報に基づいて行う段階に足を踏み出していると言えるでしょう。

CONTENTS

P1 学生の成長を可視化する教学IRと学びの実態へのアプローチ

P3 第三者の意見紹介
『共通認識と対話とリンケージの鍵となるIRの可視化』

P4 センター報告
『立命館大学の入学前教育の到達点について』
FD Glossary

P5 シリーズ質保証
『皆さんの努力が組織の成熟度を一段???押し上げました
ー大学基準協会の認証評価を受けてー』

P6 初年次教育最前線
『「Sansha Handbook」は何のために作られたか
産業社会学部における初年次“学習”の課題』

P8 ビアラーニングだより
新任教員対象FDプログラムワークショップ 実施報告
第3回教学実践フォーラム開催のお知らせ(教学IR国際セミナー)

▶ 成長モニタリングの視点と教学IR

しかしながら、個々の学生の成長は決してリニアモデルではありません。筆者自身はもちろんのこと、おそらく読者のみなさんのご記憶にもあるように、とくに心理的に揺らぎやすい青年期の成長過程は、ときとしてジグザグだったり、何らかの小さなきっかけで低迷期を脱したり、思わぬ出会い(人、モノ、情報、場所等)によって飛躍的に上昇／下降したり、といった非直線的なプロセスを描くと考えられます(いやいやずっと右肩上がりの直線だったよ、という方も中にはいらっしゃるかもしれません)。

それでは、こうした学生の成長のプロセスを私たちはどう捉え、可視化していったらよいのでしょうか。ここで注目される機能が、「インスティテューショナル・リサーチ(Institutional Research: IR)」です。IRとは、「機関の計画策定、政策形成、意思決定を支援するための情報を提供する目的で、高等教育機関の内部で行われるリサーチ」(Saupe 1990)のことですが、「リサーチ」とは言え単なる学術研究あるいは調査ではありません。むしろ、実践志向の強い組織的な調査分析活動だと言えましょう。ただし、このIRは専門の「部署」を置き、「人材」を配置しただけでは機能しません。ここで不可欠となるのが、当該大学の意思決定を支えるような「Research Question」(いわゆるお題)の設定です。あくまでも”



Institution”に固有の文脈に根差した「お題」を立てることによって、具体的な改善施策が導き出せるようなデータが得られるというわけです。

▶ IRプロジェクトの「お題」と「学びの実態調査」

さて、教育開発推進機構教育開発支援センターの特定プロジェクトであるIRプロジェクトでは、学部や教学機関と協働しながら、2009年度から「学びの実態調査」を開発・実施しています(詳細は、ITL News No.16の拙稿「どうつくる？ 大学教育の質保証を支えるしくみ—教学領域のIRコトハジメ—」をご覧ください)。同調査は、正課における学習成果の間接的な測定ツールとして開発されました。全学統一フォーマットによる悉皆調査ではなく、あくまでも個々の学部支援の一環として、ニーズに対応する形で調査票を設計しています。それゆえ、調査票は共通項目(授業外学習時間、授業経験、授業への取り組み方、成長感等)と学部独自項目で構成されており、調査の対象学年や実施時期も個々の学部が自由に選択できる形になっています。また、記名式(学生ID)を採用することによって、学内のデータベースに蓄積されている各種データ(入試方式、GPA、取得単位数、試験得点、進路状況等)とのクロス集計が可能になっています。

2009年当時、まさに「コトハジメ」だった教学IRは、学内の多くの方々のご協力のもと、三クール目の実施を迎える学びの実態調査とともに一歩ずつ前進してきています。当初、IRプロジェクトが質保証の課題を意識しながら立てたお題は次のようなものでした。それは、①立命館大生の学びは本当に「多様」なのか？、②多様ならば「どのように」多様なのか？、③その多様性に現在の「学習・教授の文脈は適合」しているのか？という問いです。もっとも、これらのお題を解き明かすのに、学びの実態調査ひとつで事足りるというわけではありません。しかし、まずは学びの現状をとらえ

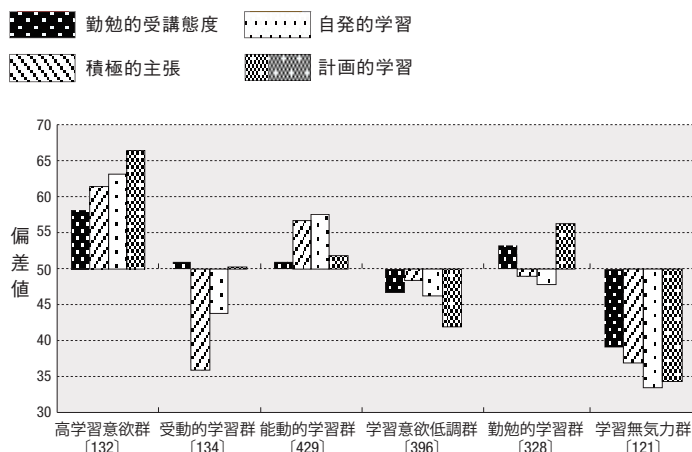
てみるというところから着手しました。学びの実態調査の結果から見てきたことは、学部固有の文脈に照らしながら順次フィードバックを行っていますが、ここではハイライトとして、岡田・鳥居他(2011)に基づきながら、上記の第一と第二のお題にかかわる実態についてご紹介しましょう。

▶ 学生の6つの学習スタイルが見えた

まず、複数学部のデータ(1578名)を用い、クラスター分析(Ward法)を行った結果、立命館大学生には6つの学習スタイルが存在しているようだ、ということがわかりました。6つの学習スタイルの特徴は、それぞれ次の通りです。①高学習意欲群: 勤勉的に受講する(履修登録した科目は途中で投げ出さない等)、計画的に学習する、積極的に主張する、自発的に学習する(授業とは関係なく、興味を持ったことについて自主的に勉強する等)、のすべての側面で最も得点が高いタイプ、②受動的学習群: 勤勉的に受講し計画的に学習することは中程度だが、積極的な主張や自発的な学習は相対的に低いタイプ、③能動的学習群: 勤勉的な受講態度や計画的な学習の得点が中程度で、積極的な主張や自発的な学習が相対的に高いタイプ、④学習意欲低調群: それぞれの学習の側面における得点が全体的に低いタイプ、⑤勤勉的学習群: 勤勉的な受講や計画的な学習が相対的に高く、積極的な主張や自発的な学習が中程度であるタイプ、⑥学習無気力群: すべての学習の側面で最も得点が高いタイプ。

成長の可視化: 学習スタイルと学習成果

多様な学習スタイルの存在(岡田・鳥居他 2011)
N=1578 クラスター分析(Ward法)により分類



※岡田・鳥居他(2011)を参照し作成。元のグラフは標準得点(平均0、標準偏差1)で作成されているが、ここでは理解しやすいように一般的に用いられている偏差値(平均50、標準偏差10)で表示。()内の数字は人数

これによると、たしかに本学の学生の学びは「多様」だと言えます。そして、その多様性は学習スタイルという観点では6つのタイプがあり、それらを意識して学びの文脈を「リデザイン」していく必要があることが示唆されました。この「リデザイン」の場面では、学部・学科とFDセンターの協働が欠かせません。なぜなら、学部固有の文脈(目標、カリキュラム、資源、環境等)に照らしたデータの解釈を行う上で、学部の教職員の視点と経験が不可欠になるからです。

▶ データや情報を介した対話づくりへ

以上のような学びにかんするデータや情報を媒介とした「対話」の機会を学内で創り出すために、本機構では各学部へのフィードバックを基本に、各種のセミナーやワークショップ、助言提供等を行っています。過去二回開催した教学IRセミナーの続編として、2012年1月27日にはアメリカとオーストラリアの大学からトップマネジメントをお招きし、教学IRの活用方法に関する国際セミナーを開く予定です。

また、学びの実態調査の結果に基づく効果的なレポートの追求も課題のひとつです。IRプロジェクトでは、学びの実態調査で得られたデータや情報を、学生たちの学びの過程や成果と同様に、大学が大切にすべき「財産(asset)」のようなものと見なしています。そこで、調査から見えてきたことを手がかりに、本学の学生、教職員のみなさんから寄せられた疑問に答える形で、2011年度から『学びのIRレポート』をWebで発行しています。

『学びのIRレポート』

<http://www.ritsumeit.ac.jp/acd/ac/itl/irp/index.html> (Rainbow IDでアクセス)

まだまだ成長途上にある教学IRの今後の課題はいくつもあります。具体的には、①データが語ることを学部との「対話」に寄せ、実現可能な改善策を、組織の意思決定へつなげること、②学びの実態調査と既存調査や他企画とのリンケージをはかること、③調査から得られたデータと既存データベース(教務、学生、入試等)のリレーショナルな活用をはかること等です。

ただし、こうした課題を追求する上で、学びの実態調査の可能

性ととともに、その限界を冷静に見つめておく必要があるでしょう。学びの実態調査は、「多様」というひと言で括られがちな学生実態をデータに基づき把握し困難を抱える学生群を可視化すること、それらの困難を乗り越えるために学びにポジティブ／ネガティブな影響を与える要因を可視化し、学習・教授のあり方を見直すことに有効だということが示されました。すなわち、データに基づく課題の理解と分析及び改善につなげるFDツールとして、学びの実態調査は大きな可能性を秘めているということです。一方で、調査方法の問題点としては、学生実態の全体的な傾向はつかめるものの、ダイナミックな成長のプロセスは捨象されることや、設計者にとって未知の課題をあらかじめ調査票に組み込むことが難しいこと等が挙げられます。こうした問題点については、基礎研究を積み重ねたり、インタビュー等の質的調査を組み合わせることによって解決していきたいと考えています。

学びの実態調査を軸とした教学IRは、いわば学生たちの成長の歩みと同調しながら進んでいるとも言えます。成長のトータルな可視化には相応の時間が必要でしょう。しかし、着実に歩を進めていくことによって、本学の学生、教員、職員等のアクターがそれぞれの立場から学びのコミュニティの成長をモニターし当事者意識を持って内部質保証システムを整え運用していくことの一助となることを目指しています。



本稿へのご質問やご意見は、
learners@st.ritsumeit.ac.jp (教育開発支援課) までお寄せ下さい。

主な参考文献

岡田有司・鳥居朋子・宮浦 崇・青山佳世・松村 初・中野正也・吉岡 路(2011)「大学生における学習スタイルの違いと学習成果」、『立命館高等教育研究』第11号、p.167-182。(本機構のウェブサイトからダウンロードしていただけます)

第三者の 意見紹介



共通認識と対話とリンケージの鍵となるIRの可視化

山本 以和子 京都工芸繊維大学 アドミッションセンター



改革や改善を目指す場合、必ず目的があります。実践してきたものの、何かうまくいかない、どうすればうまくいくかを考える際にこの目的がなければ、方策は迷走してしまいます。状況を示す科学的データは、迷走させないための重要なポジションを担っています。しかし、そのためにインディケータは正確性が求められます。なぜなら、現状を評価して課題を見つけるには、目的に適合しているインディケータを用いなければ意味がないからです。

次に、評価のアナリストは、自分だけに見えていた世界を他人と共有化することで共通認識や対話を生み出すことができます。実は、この「共通認識」によって初めて改革や改善がスタートするのです。つまり、共通した課題認識の後に、改革や改善へ向けてのテーブルに皆が座り、対話が生まれ、コトが動き出すのです。しかし、現状において非常に有効な分析結果は難解で、統計学を専門的に学んでいないとその背景すらも理解できないものが多いのが現状です。改革対象に改革を促すには、彼らのステージに合わせる必要がありますし、礼儀として要求されたりもします。その時必要な、「見えてわかる」可視化された分析結果なのです。

本学でも、学力試験を課さないAO入試の学生の成績を追跡し、一般入試との成績評価を比較して試験内容を検証する目的の調査がありました。これを各委員会等で簡便に利用し、入試を検討してきましたが、それは完璧なインディケータとは言えません。なぜなら、入学後の大学生活環境によって学生の学修成果は異なることがあるからです。そこで、現行の入試方

式も検証しながら入学以降の大学活動に乗じて学生の学びの軌道を調整することはできないかという目的で開発したのが成績閲覧システムです。一時的な成績状況だけではなく

成績推移も可視化したところ、多くの類型の存在と類型ごとの指導方策が示唆されました。さらに、学生にモニターしたところ、「GPAで良し悪しの予想はつくが、課程(学科)内での相対的な位置まではわからなかった。これならもう少し勉強に力をいれなければならないと感じた」といった声が出てきました。データで自分の状況が見えること、しかも誰にでも理解できるデザインでの可視化は、本人の自発的な学修意欲も喚起することができ、効果も期待できることがわかってきました。

さらに、これを教育的指導や教養するファカルティが利用すれば、より一層の効果を発揮することは容易に予想できます。しかし、このIRとFDのリンケージがまだまだ進行しないのが、大学現場の難しいところ。貴学でもIR側の学内セミナー、ワークショップ、そして起爆剤となる国際セミナーの開催企画、さらに調査結果レポートの工夫と活用の実現化及び活用促進に注力なされています。学生を支援する側の学習成果のための熟練したスキルと科学的分析に基づいた情報および能力開発方策をもつてれば、さらなる学修成果の向上が見込まれるわけで、だからこそIRとFDのリンケージが強く求められるところなのです。

立命館大学の入学前教育の到達点について

椋本 洋 教育開発推進機構 教授 / 接続教育支援センター長



大学審議会答申『大学入試の改善について』（2001.11）では、入学前教育について、「大学が入学前に行っておくべき学習準備等についてのアドバイスを行ったり具体的な課題を課す。…（中略）…高等学校での学習と関連付けつつ入学準備を行わせる等により、学習に対する動機を維持し、入学までの期間を有意義なものとするよう支援すること」（アドミッション・オフィス入試に求められるもの）と述べられています。本学では、この答申の出されたほぼ同時期に、「本学に入学してくる学生がスムーズに大学の学習に入れるように、入学前教育を進めることが重要な課題となっている。…早期に本学に合格している生徒を対象に入学前教育を勧める『プレエントランス立命館デー』（以下、略称『プレエン』）を実施し、同時にWEBによる入学前教育も試行的に実施しています。…高大連携については、2002年度より高大連携推進室を設置し、一層を図る積極的な展開予定である。」（『教学改革の到達点と課題』立命館大学全学自己評価委員会、2002,7）として入学前教育を開始しています。

その後、本学の入学前教育は、アンケート調査などによる実態調査を踏まえながら、毎年、改善を行ってきました。その結果、①学習意欲の向上、動機づけ、②高校生として必要な基礎学力の確認・補習及び大学教育における基礎的能力の習熟、③入学後の学部・学科の学びを知るなどを入学前教育を行う目的としています。

これらの入学前教育を実施していく上で、全国から、入学予定者が集まり受講する「プレエン」の持つ意義は大きいものがあります。そのため、改善点の第一は、2011年度から、①、③を重視する意味で、従来の講座の作り方を変更しました。すなわち、前半に学

部の講座を実施し、後半に入学前講座の案内などを行う全体講座を行うということです。これは、入学前講座を受講する動機の最大の理由が学部の学びへの誘いなどを受けて、という参加者のアンケート結果を受けての改善です。

改善の二つ目は、入学前講座を受講する際に、①英語・数学の基礎学力調査、②高校までの学びの姿勢や意欲を問う学習意識アンケート、③読書と小論文に関する自己診断アンケートからなる『新しい学びに向けて—自己の学習と生活を点検する』を、WEBを利用して実施し、その結果を「プレエン」の際に説明し、参加者の自己省察に基づく入学前講座の選択ができる仕組みを作ったことです。

改善の3点目は、業者の提供する「講座」を学部や機構の教職員がかかわり、講座内容を学部の学びに接続するようにしましたことです。また、受講生の学習環境などを考慮し、通学講座、Eラーニング講座、通信添削講座を用意し、上記、基礎学力調査による自己診断により難易度別講座を選択できるようにしました点です。

また、各学部から入学前に読ませたい図書を推薦していますが、これについても、スポーツ選抜特別入試合格の入学予定者に実施した「日本語基礎トレーニング」（ITLNEWS, 2010, NO17）および本機構が開発してきた「特殊講義 学びのとびら・入門」の実施に伴うノウハウの蓄積を生かして、各学部推薦図書の中から課題図書を選んでいただき、小論文の講座として設計しています。

こうして、本学の入学前講座をはじめとする入学前教育は、入学後の初年次教育を視野に入れた内容として展開されています。今後も、各学部、教学諸機関および入学センターなど他部局と連携しながら、さらなる改善を積み重ねていきたいと考えています。

FD Glossary

GPA [Grade Point Average]

GPAは世界（特に米国）で一般的に行われている成績評価方法の一種である。授業ごとの成績評価を5段階で行った上、高評価から4,3,2,1,0とグレードポイントを付与し、1単位あたりの平均を出す。この成績指標で学生の学習成果を取得単位数だけでなく総体的にとらえ、2.0未満を学力不振者として学習指導・生活指導を行うとともに、数セメスターに渡って学力不振が続いた場合には退学勧告がなされる。また、グレード1は単位取得ではあるが、卒業には通算2.0以上が必要とされている。

本学では2002年より学生の成績表にGPAを記載することとなった。

学生が自らの学習成果を確認できるようにするとともに、不合格科目を計算に入れて安易な受講登録を抑制する効果を期待してのものであった。現在は奨学金の選考などでの成績指標として定着するとともに、複数の学部ではGPA分布を公開するなどの取り組みも行われている。しかし世界標準とは異なり、導入以前からの学内成績指標との連続性を重視して高評価から5,4,3,2,0とグレードポイントを付与している他、卒業要件や退学勧告といった利用法はされていない。

本学のGPAは導入から10年になり、グレードポイントの計算法と利用法について全学的に見直しを行ってもよい時期に来ている。

シリーズ
質保証

皆さんの努力が組織の成熟度を一段???押し上げました —大学基準協会の認証評価を受けて—

安岡 高志 教育開発推進機構 教授 / 教育開発支援センター長

2011年10月18日(火)午後、本学の大学基準協会実地調査全体会に出席する機会を得ました。そこでの調査団の大きな興味の一つは新TERIへの期待であったようです。視察団長の法政大学の浜村彰常務理事から新TERIと旧TERIの差異についての質問があり、これに対して大幅に簡素化したことにより、新TERI対象項目を精選する必要から学部自主性を持たせたことである旨の回答が立命館大学側からありました。今回皆さんにお伝えしたいことは大学基準協会の認証評価を受けたことにより、組織の成熟度がどのように変化したかです。その前にTERIのすばらしさはTERIそのものの意味にあることを復習しておきたいと思います。TERIはTotal Educational Reform Indicatorの頭文字でその意味は教育改革総合指標、その評価基準は表1のように2007年に本学で定義されており、指標と評価基準を持ち、第4段階にビジョンが示されていることがすばらしいところです。

本題にもどりますと、今回の大学基準協会に提出された自己点検・評価報告書を見て変わったことは既に行ったことの結果や報告、これからの計画に対して全てエビデンスがついていることです。過去のことについての報告ではデータなどが添付されていることはもちろんですが、今後の計画においてもどのような会議で誰がどのようにして合意を得たかが示されており、主に教授会の議事録が添付されていました。この状態を表1の評価基準にしたがって成熟度を見てみますと次のようになります。今回の自己点検・評価報告書以前は私が見る限り、成熟度2の段階であったと思われます。なぜなら、今後の計画などで、十分な合意が得られた結果であるとは思えない記述が多くみられたからです。これに対して、今回の報告書は議事録などがエビデンスとして添付されていることから合意が得られ、周知されているレベルにさしかかったことを意味すると見ることができます。私の感覚では第二レベルに両足で立っていた立命館大学が少なくとも第三レベルに向けて片足を第二レベルから離れたことは確実であると思われます。この足を第三レベルにかけると、元の第二レベルに戻すかは、組織の皆さんの自覚次第です。ここで皆さんに皆さんの努力によって皆さんの組織の成熟度が一段上がりかかったことをお伝えできるのはTERIが指標と基準を持っているからです。この指標と基準がなければ、皆さんの努力によって何がどのように変わったかをお知らせすることができません。私が自己点検・評価の研修ガイダンスで用いている一枚のスライドの内容は次の通りです。

表1
立命館大学における
教育改革総合指標の成熟度評価基準

- 1 形式的な検討であったり、
検討が行われていないレベル
- 2 具体的な検討が行われたが、
学部教員全体の合意が得られていないレベル
- 3 実効性が検討され、合意が得られ、
周知されているレベル
- 4 社会のニーズの変化に対して機敏に対応するための
継続的、組織的な体制が整っているレベル

自己点検・評価とは

- 目的を達成するための手段である。
- 質を保証するための手段である。
- 将来に向かって努力するものである。
- 認証評価機関から認証を得ることを目的とするものではない。
- 認証は高等教育機関として必要最小限度の環境整備である。
- 認証は経営の安定、受験生の殺到の保証ではない。

あまり認証評価の意味を認めていませんでしたが、外部評価も皆さんのように積極的に活用すれば、有効に生かせることを認識させていただいた次第です。

最後に新TERIの特徴をもう一つお知らせします。TERIは組織がPDCAサイクルを回すための小道具であり、TERIはコンピュータ上のシステムを指したのですが、旧TERIはこのシステムの提供に主眼をおいていたといえます。すなわち、PDCAサイクルのPlanで決定したことや収集したデータのアーカイブ機能を主眼に置いたために、Planで何をどのように決定し、データをどのように収集するかノウハウをお知らせせず、入れ物のみを提供したことから、多少戸惑いを皆さんに与えてしまったものと考えています。

新TERIに関する教育開発支援センターの支援内容のほとんどはPDCAサイクルを組織に浸透させるためのPDCAサイクルの考え方やロジックの組み立て方が大部分を占めています。支援は一人から100名程度まで何回でも対応させていただく用意があります。また、TERIに入力されたデータにつきましても点検させていただき、必要があればアドバイスをさせていただきます。是非教育開発支援センターを大学基準協会と同様に積極的にご利用いただきますようお願いできれば幸いです。

今回TERIという指標と基準があつたからこそ、皆さんの努力が組織を変えたことをお伝えすることができました。TERIは指標と基準をうち立てて取り組むシステムです。TERIを活用して、立命館大学の教育成果を世間に向かってアピールできるようになれば嬉しい限りです。

初年次教育 最前線

「Sansha Handbook」は何のために作られたか

産業社会学部における初年次“学習”の課題

景井 充 産業社会学部 准教授



産業社会学部における初年次“学習”の課題をめぐっては、社会学をベースとする社系学際学部が孕む独特の構造的特質に由来して、他学部に比して幾重にもユニークなものがあります。

そもそも、1950年代後半から60年代前半の時代状況を背景に設立された、“社会問題学部”ともいべき性格を持つことから、産業社会学部はいわば純粋アカデミズムの世界に閉じこもることができません。したがって学生の学びのありかたとしても、現実の社会的世界に生起する何らかのコンテポラリーな「社会問題」を自ら取り組むべき「課題」として引き受け、その「課題」解決に至るまでを当事者的に追究する、主体的なテーマ・リサーチ型の学習・研究スタイルとなります。本学部が「アクティブ・ラーニング」を謳う所以です。

その際、たとえば公害問題や環境問題を典型とするように、「社会問題」の発見および解決への取り組みは複数の学術分野の知識を要求しますから、異質な「知」をアレンジする中から新たな「知」を創造する“編集的知性”が開発されます。そして現実的な解決を目指す活動の中で、実践的行動力が鍛えられていきます。

狭い私的関心や特定の学問分野に没入するのではなく、リアルな「社会問題」に即して多様な知識と経験の蓄積を客観的かつ批判的に総合し動員することのできる、創造的な思考力と実践力を育成すること、これが産業社会学部における学びの眼目です。

さらに、いかなる「社会問題」にも、それが“問題”と呼ばれる以上は倫理的要素が絡まります。そして究極的には、いずれの“問題”の渦中にも、歴史的・社会構造的にその中に置かれ、しばしば「被害者」と呼ばれる生身の人間が存在しています。“社会問題学部”における学びは、高度に抽象的であり、同時に極めて具体的・人間的です。

中等教育における一種独特に“抽象的”かつ“消費的”な学びとの、この何重もの隔たりを、もとより一足飛びに転換することなどできません。しかし、産業社会学部での日々を《学びと成長》の機会とするためには、この方向への転換に初年次から取り組む以外にはありません。産業社会学部における学びはここから始まります。「Sansha Handbook」の入門編が学びの《方法》の習得に重心を置いているのは、本「ITL News」のNo.12 (2009年2月) に記されているように、300名に迫る学生・院生とのインタビューを通じて、“方向喪失状態”とも言うべき学生たちの大衆化状況 — 「心の隙間」をかかえた「自分探しの無限連鎖」 — が判明したことを踏まえ、学生の目線に即し、その学習経験の帰納的蓄積に沿いながら、“編集的知性”を駆動する知的生産活動への転換を誘導することが必要だ、と判断したからです。

内容を順に紹介しますと、「「大学での学び方」を学ぼう」の章では、[勉強と研究の違い]、[高校と大学の「授業」の異質さ]、[レポートの書き方]、最後に[成績評価]を説明し、意識的に学びを転換することを呼び掛けています。次いで「基礎演習」の手引き」の章では、

集团的テーマ学習に取り組むことの多い基礎演習の実態を念頭に置いて、[研究テーマの選定]、[資料・データの収集]とその[取り扱い方]、[調査結果の分析方法]、[レジユメの作成方法]、[プレゼンテーションの知識と技法]、そして[成果の公表]という順序で、基礎演習での獲得目標としている5つの知的生産能力 — 問題発見と探究の能力・調査する能力・発表する能力・討論する能力・人と人とを結びつける能力 — の帰納的育成プロセスを提示しました。「先輩に学ぶ「研究テーマ」の見つけ方・深め方」の章ではそれを受け、専攻に即して学生の学びの実例を参考に供し、最後に「学生生活4年間を設計する」(2011年度版より「産業社会学部での学びと社会学」)と題する章において、産業社会学部の教学設計が独特の立体的構造を持つことを述べ、それを踏まえて学びを構想することを求めています。

産業社会学部が対峙する社会的諸問題は多様で深淺もさまざまです。しかし、社会的諸問題にアプローチする中から知的生産活動としての《学び》を立ち上げるための基本的な考え方や手法を獲得すること、これが産業社会学部における初年次“学習”の最前線で取り組むべき最重要の「課題」であることに、変わりはありません。

SANSHA HANDBOOKの使い方

さんしゃハンドブック「産業社会学部で学ぶ 入門編」は、これからみなさんが、さんしゃでの学びをスタートするためのヒントとなるよう、作成しました。全体で5つのコーナーがあり、それぞれのコーナーは以下のようなコンセプトで編集しています。

- 【P2-3】 グリーンのページ**
学生生活4年間を設計する
 大学のプログラムとみなさんが「やりたいこと」を、どううまくマネジメントしていくかが、みなさんの学生生活を充実したものに最大のポイントです。さんしゃは、学生が自主的に活発に活動している学部です。新入生のみなさんも、ぜひその仲間！
- 【P4-7】 ピンクのページ**
「大学での学び方」を学ぼう
 「大学での学び」は、高校までのそれとは違うという話をよく聞きます。では、いったいどう違うのでしょうか？ 講義、演習など大学の「授業の受け方」を説明します。
- 【P20-38】 ブルーのページ**
「基礎演習」の手引き、「基礎演習」の応用
 「大学での学び」は自分でテーマを持ち、それについて調べたことをプレゼンテーションしていくというゼミナール形式が中心です。1回生の「基礎演習」では、その基礎的なことをとりとて体験します。「基礎演習」の手引き」のアドバイスを参考に、楽しくアクティブに、大学での研究活動に参加しましょう。
- 【P29-59】 オレンジのページ**
先輩に学ぶ「研究テーマ」の見つけ方・深め方
 大学では、これを勉強しておけば理解できる、というようなことはありません。よく言われるように、自分でテーマを見つけて、研究を進めていきます。ここでは、みなさんの先輩たちが、どのようなテーマを持って研究に取り組んでいるかを紹介します。
- 【P62-78】 ライトブルーのページ**
産業社会学部での学びと社会学
 産業社会学部で、社会学を基礎に社会問題を解明するような学びがどのように進められているのでしょうか？ そもそも社会学の学び方とは？ 学び方や心構えを説明します。

- | | | |
|--|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> 1 SANSHA HANDBOOKの使い方 2 あいさつ 3 学生生活の4年間を設計しよう 4 さんしゃでの学びと将来の進路・キャリア形成を考える 5 大学での「学び」と「学生生活」は自分の手で作りあげよう 6 勉強と研究…どう違う？ 7 勉強と研究…どう違う？ 8 勉強と研究…どう違う？ 9 勉強と研究…どう違う？ 10 勉強と研究…どう違う？ 11 勉強と研究…どう違う？ 12 勉強と研究…どう違う？ 13 勉強と研究…どう違う？ 14 勉強と研究…どう違う？ 15 勉強と研究…どう違う？ 16 勉強と研究…どう違う？ 17 勉強と研究…どう違う？ 18 勉強と研究…どう違う？ 19 勉強と研究…どう違う？ 20 勉強と研究…どう違う？ 21 勉強と研究…どう違う？ 22 勉強と研究…どう違う？ 23 勉強と研究…どう違う？ 24 勉強と研究…どう違う？ 25 勉強と研究…どう違う？ 26 勉強と研究…どう違う？ 27 勉強と研究…どう違う？ 28 勉強と研究…どう違う？ 29 勉強と研究…どう違う？ 30 勉強と研究…どう違う？ 31 勉強と研究…どう違う？ 32 勉強と研究…どう違う？ 33 勉強と研究…どう違う？ 34 勉強と研究…どう違う？ 35 勉強と研究…どう違う？ 36 勉強と研究…どう違う？ 37 勉強と研究…どう違う？ 38 勉強と研究…どう違う？ 39 勉強と研究…どう違う？ 40 勉強と研究…どう違う？ 41 勉強と研究…どう違う？ 42 勉強と研究…どう違う？ 43 勉強と研究…どう違う？ 44 勉強と研究…どう違う？ 45 勉強と研究…どう違う？ 46 勉強と研究…どう違う？ 47 勉強と研究…どう違う？ 48 勉強と研究…どう違う？ 49 勉強と研究…どう違う？ 50 勉強と研究…どう違う？ 51 勉強と研究…どう違う？ 52 勉強と研究…どう違う？ 53 勉強と研究…どう違う？ 54 勉強と研究…どう違う？ 55 勉強と研究…どう違う？ 56 勉強と研究…どう違う？ 57 勉強と研究…どう違う？ 58 勉強と研究…どう違う？ 59 勉強と研究…どう違う？ 60 勉強と研究…どう違う？ 61 勉強と研究…どう違う？ 62 勉強と研究…どう違う？ 63 勉強と研究…どう違う？ 64 勉強と研究…どう違う？ 65 勉強と研究…どう違う？ 66 勉強と研究…どう違う？ 67 勉強と研究…どう違う？ 68 勉強と研究…どう違う？ 69 勉強と研究…どう違う？ 70 勉強と研究…どう違う？ 71 勉強と研究…どう違う？ 72 勉強と研究…どう違う？ 73 勉強と研究…どう違う？ 74 勉強と研究…どう違う？ 75 勉強と研究…どう違う？ 76 勉強と研究…どう違う？ 77 勉強と研究…どう違う？ 78 勉強と研究…どう違う？ 79 勉強と研究…どう違う？ 80 勉強と研究…どう違う？ 81 勉強と研究…どう違う？ 82 勉強と研究…どう違う？ 83 勉強と研究…どう違う？ 84 勉強と研究…どう違う？ 85 勉強と研究…どう違う？ 86 勉強と研究…どう違う？ 87 勉強と研究…どう違う？ 88 勉強と研究…どう違う？ 89 勉強と研究…どう違う？ 90 勉強と研究…どう違う？ 91 勉強と研究…どう違う？ 92 勉強と研究…どう違う？ 93 勉強と研究…どう違う？ 94 勉強と研究…どう違う？ 95 勉強と研究…どう違う？ 96 勉強と研究…どう違う？ 97 勉強と研究…どう違う？ 98 勉強と研究…どう違う？ 99 勉強と研究…どう違う？ 100 勉強と研究…どう違う？ | <ul style="list-style-type: none"> 1 レポートの書き方 2 レポートの書き方 3 レポートの書き方 4 レポートの書き方 5 レポートの書き方 6 レポートの書き方 7 レポートの書き方 8 レポートの書き方 9 レポートの書き方 10 レポートの書き方 11 レポートの書き方 12 レポートの書き方 13 レポートの書き方 14 レポートの書き方 15 レポートの書き方 16 レポートの書き方 17 レポートの書き方 18 レポートの書き方 19 レポートの書き方 20 レポートの書き方 21 レポートの書き方 22 レポートの書き方 23 レポートの書き方 24 レポートの書き方 25 レポートの書き方 26 レポートの書き方 27 レポートの書き方 28 レポートの書き方 29 レポートの書き方 30 レポートの書き方 31 レポートの書き方 32 レポートの書き方 33 レポートの書き方 34 レポートの書き方 35 レポートの書き方 36 レポートの書き方 37 レポートの書き方 38 レポートの書き方 39 レポートの書き方 40 レポートの書き方 41 レポートの書き方 42 レポートの書き方 43 レポートの書き方 44 レポートの書き方 45 レポートの書き方 46 レポートの書き方 47 レポートの書き方 48 レポートの書き方 49 レポートの書き方 50 レポートの書き方 51 レポートの書き方 52 レポートの書き方 53 レポートの書き方 54 レポートの書き方 55 レポートの書き方 56 レポートの書き方 57 レポートの書き方 58 レポートの書き方 59 レポートの書き方 60 レポートの書き方 61 レポートの書き方 62 レポートの書き方 63 レポートの書き方 64 レポートの書き方 65 レポートの書き方 66 レポートの書き方 67 レポートの書き方 68 レポートの書き方 69 レポートの書き方 70 レポートの書き方 71 レポートの書き方 72 レポートの書き方 73 レポートの書き方 74 レポートの書き方 75 レポートの書き方 76 レポートの書き方 77 レポートの書き方 78 レポートの書き方 79 レポートの書き方 80 レポートの書き方 81 レポートの書き方 82 レポートの書き方 83 レポートの書き方 84 レポートの書き方 85 レポートの書き方 86 レポートの書き方 87 レポートの書き方 88 レポートの書き方 89 レポートの書き方 90 レポートの書き方 91 レポートの書き方 92 レポートの書き方 93 レポートの書き方 94 レポートの書き方 95 レポートの書き方 96 レポートの書き方 97 レポートの書き方 98 レポートの書き方 99 レポートの書き方 100 レポートの書き方 | <ul style="list-style-type: none"> 1 プレゼンテーションをしよう 2 プレゼンテーションをしよう 3 プレゼンテーションをしよう 4 プレゼンテーションをしよう 5 プレゼンテーションをしよう 6 プレゼンテーションをしよう 7 プレゼンテーションをしよう 8 プレゼンテーションをしよう 9 プレゼンテーションをしよう 10 プレゼンテーションをしよう 11 プレゼンテーションをしよう 12 プレゼンテーションをしよう 13 プレゼンテーションをしよう 14 プレゼンテーションをしよう 15 プレゼンテーションをしよう 16 プレゼンテーションをしよう 17 プレゼンテーションをしよう 18 プレゼンテーションをしよう 19 プレゼンテーションをしよう 20 プレゼンテーションをしよう 21 プレゼンテーションをしよう 22 プレゼンテーションをしよう 23 プレゼンテーションをしよう 24 プレゼンテーションをしよう 25 プレゼンテーションをしよう 26 プレゼンテーションをしよう 27 プレゼンテーションをしよう 28 プレゼンテーションをしよう 29 プレゼンテーションをしよう 30 プレゼンテーションをしよう 31 プレゼンテーションをしよう 32 プレゼンテーションをしよう 33 プレゼンテーションをしよう 34 プレゼンテーションをしよう 35 プレゼンテーションをしよう 36 プレゼンテーションをしよう 37 プレゼンテーションをしよう 38 プレゼンテーションをしよう 39 プレゼンテーションをしよう 40 プレゼンテーションをしよう 41 プレゼンテーションをしよう 42 プレゼンテーションをしよう 43 プレゼンテーションをしよう 44 プレゼンテーションをしよう 45 プレゼンテーションをしよう 46 プレゼンテーションをしよう 47 プレゼンテーションをしよう 48 プレゼンテーションをしよう 49 プレゼンテーションをしよう 50 プレゼンテーションをしよう 51 プレゼンテーションをしよう 52 プレゼンテーションをしよう 53 プレゼンテーションをしよう 54 プレゼンテーションをしよう 55 プレゼンテーションをしよう 56 プレゼンテーションをしよう 57 プレゼンテーションをしよう 58 プレゼンテーションをしよう 59 プレゼンテーションをしよう 60 プレゼンテーションをしよう 61 プレゼンテーションをしよう 62 プレゼンテーションをしよう 63 プレゼンテーションをしよう 64 プレゼンテーションをしよう 65 プレゼンテーションをしよう 66 プレゼンテーションをしよう 67 プレゼンテーションをしよう 68 プレゼンテーションをしよう 69 プレゼンテーションをしよう 70 プレゼンテーションをしよう 71 プレゼンテーションをしよう 72 プレゼンテーションをしよう 73 プレゼンテーションをしよう 74 プレゼンテーションをしよう 75 プレゼンテーションをしよう 76 プレゼンテーションをしよう 77 プレゼンテーションをしよう 78 プレゼンテーションをしよう 79 プレゼンテーションをしよう 80 プレゼンテーションをしよう 81 プレゼンテーションをしよう 82 プレゼンテーションをしよう 83 プレゼンテーションをしよう 84 プレゼンテーションをしよう 85 プレゼンテーションをしよう 86 プレゼンテーションをしよう 87 プレゼンテーションをしよう 88 プレゼンテーションをしよう 89 プレゼンテーションをしよう 90 プレゼンテーションをしよう 91 プレゼンテーションをしよう 92 プレゼンテーションをしよう 93 プレゼンテーションをしよう 94 プレゼンテーションをしよう 95 プレゼンテーションをしよう 96 プレゼンテーションをしよう 97 プレゼンテーションをしよう 98 プレゼンテーションをしよう 99 プレゼンテーションをしよう 100 プレゼンテーションをしよう |
|--|--|--|



産業社会学部での学びは「自由」であり、かつ「責任の伴うもの」だからこそ、この場所にある学びの機会をどう捉え、実践へと移していくかはあなた次第です。社会に向き合い、自分に向き合う中で、日々の学生生活を、意識的な学びのアプローチの場へと変えていくことで、自覚を持って、「産社らしさ」をぜひ見出してもらいたいと思います。

「Sansha Handbook」は、教職員・学生の三者の参画のもとに作成されています。全てのページに、学生や教員が登場し、産業社会学部での学びについて、わかりやすく解説しています。

各学部におけるオリジナルテキストの活用状況

初年次教育の一環としての小集団クラスにおいて、1回生が自らの学生生活を設計し、主体的に学んでいくための「大学での学び」を学ぶこと、また各専門領域において必要不可欠となる、基礎的な知識や方法論、技法を身につけることを目的として、人文社系の学部を中心にオリジナルテキストが発行されています。授業内報告の題材や討論のトピックスとしても利用されており、時代の変遷に合わせ、適宜改訂をされているものも少なくありません。また多くの学部において、オリジナルテキストは初年次教育時のみの利用に留まらず、4年間の学習において必要となる基礎スキルの手引書となることを想定して作成されています。

オリジナルテキストの活用方法は、教材としてはもちろんのこと、授業内容を補完するための参考資料としての利用など、多岐に渡っています。国際関係学部の基礎演習では、オリジナルテキストの内容を正確に理解することが求められており、学生が任意の論点において発展的・批判的な研究の上、クラス内で報告を行うことが、全クラス共通で定められています。

2011年11月現在、学部共通のオリジナルテキストを発行しているのは7学部（法、産業社会、文学部、国際関係（グローバル・スタディーズ専攻は除く）、経済、経営、スポーツ健康科学部）で、2012年度より政策科学部が導入を予定しています。



他大学の取り組みのご紹介

関西国際大学



知へのステップ
・大学生からのスタディスキルズ・
(ついで出版)

「大学での勉強の仕方がわかる」と支持を受け続け、150校以上の大学・専門学校が採用。「聴く、読む、調べる、整理する、表現する、伝える、考える」など、大学の授業で必要となる基礎的な能力を養える。

東京電機大学



フレッシュマン
・フレッシュマン
・大学新入生のための学び
ワークブック
(東京電機大学出版局)

大学生としての生活態度、講義の受け方、考え方、情報の調べ方、レポートの書き方等、基本的な心構えから学習・研究の進め方まで丁寧に解説。自ら学び有意義な大学生活を送るためのガイド。切り取り提出型課題付き。2005年から実施されている東京電機大学での初年次教育実践をもとに編纂。

玉川大学



大学生活ナビ
(玉川大学出版部)

大学と高校の違いから、効果的な学び方、社会参加まで、〈学士力〉を身につける方法を解説する一冊。大学生活を送るヒントを具体的に提示する。玉川大学をはじめとした数校で教科書として採用されている。

Let's share "LIVE VOICE" with Rits!

立命館大学 学生FDスタッフ 理工学部3回生 木下明紀

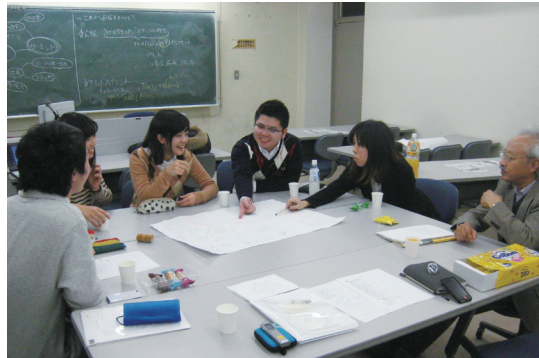


私たち「学生FDスタッフ」は、2007年度から毎年「授業インタビュー」という企画を続けてきました。私たちスタッフが受けた授業の中からぜひ皆さんにも知らせたいと思う授業を選び、授業の紹介だけでなく、その授業への先生方の思いをインタビューという形で聞き、「FDSレポート」という冊子やWebで学内外へ発信してきました。

また2008年度からは、スタッフ以外の学生からも授業や大学に対する「学生の生音・意見」を出してもらい、それらを本学の教育や授業の改善に反映していこうと、「しゃべり場」という企画を始めました。テーマは「講義が面白いと思った瞬間」や「教養教育とは?」というものでした。

この「しゃべり場」は2009年度から私たち学生FDスタッフと教育開発推進機構が始めた「学生FDサミット」で毎回実施され、今では学生FDを始めた全国の大学で広まっています。ちなみに、今年の夏に衣笠キャンパスで開催した「学生FDサミット2011夏」のしゃべり場のテーマは「どんな授業がいい?」、「大学で何がしたい?」、「課外活動って必要?」でした。

しかし、最初に「しゃべり場」を始めた本学では、その後「学生FDサミット」の開催に追われて、学内での「しゃべり場」も途絶えがちでした。ですので、今後は先生方への「授業インタビュー」だけでなく、学生たちへの「学生インタビュー」を行い、



それらの中から共通のテーマを選び、学生・教員・職員が自由に話し合いながら、一緒に解決策を考える場として新たな「公開しゃべり場」を目指したいと思っています。

その第一歩として、去る11月5日にびわこ・くさつキャンパス学園祭で、翌週11月12、13日には衣笠キャンパス学園祭で、私たちは「学生インタビュー」を実施しました。今回は初の試みとなりましたが、両キャンパス合わせ50名を超える学生に授業への思いを聞くことができました。最も多かったのは私語問題と授業への不満でしたが、これらを単なる不満だけに終わらず、立命館大学における学びの充実のために何ができるかを皆で考える場を作り出す必要があることを再確認しました。

さらに、学生インタビューで多くの学生が自分を「生徒」と呼んでいたことに気づき、私たちが「学生」を名乗ることの意味を改めてかみしめました。学生・教員・職員の三位一体でFDに取り組み、「大学生としての学びの充実」を目指すこと、それが私たち学生FDスタッフの目標です。私たち学生の立場では大学内で最も身近にあるものは講義であると思います。FDを知らない学生にも学生生活で最も身近にある講義というものを考える中でFDというものを身近に感じ、少しずつ興味を抱いてもらいたいと思っています。

報告

新任教員対象FDプログラムワークショップ 実施報告(9月～11月)

9月19日(月)・20日(火) 【KIC】～授業設計論演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ～

1日目には、カリキュラム開発と授業設計の基本的な考え方、到達目標の設定方法を学び、その後、授業設計の手法のひとつである強制連結法を用い、実践しました。2日目には、実際の担当授業のマイクロ・ティーチング(模擬授業)を行いました。ピア・レビューを行うことにより、授業を行ううえでの具体的なヒントを得る機会となりました。受講者からは、シラバスの書き方や授業設計など、日々の授業に直結する実践的な内容であり、早速授業に活かしたいとの感想が聞かれました。



11月12日(土) 【BKC】～心理学演習Ⅱ・Ⅲ～

① 心理学演習Ⅱ ～イヌバラ法～

授業内外での学生とのコミュニケーションにおいて、質問しやすい雰囲気作りや学生の生音を聞き出すことに役立つ技能の修得を目的として、カウンセリング研修などに用いられる「イヌバラ法」という手法を使い、受容的に聴く力のトレーニングを行いました。

② 心理学演習Ⅲ ～アサーション・トレーニング～

日常の場面で起こりうる「学生への対応」を題材としたロールプレイを通じて、自身の日頃の学生への対応を振り返り、学生の意見や気持ちを考慮しながら適切に指示、指導する方法について考えました。



第3回教学実践フォーラム開催のお知らせ(教学IR国際セミナー)

根拠に基づく教学改善とはどのように果たされるのでしょうか?第3回教学実践フォーラムでは教学IRをテーマとし、先進的なIRの取り組みを展開しているアメリカとオーストラリアの大学の学級管理職をお招きして、さまざまなデータや情報に基づく教育改善のあり方について理解を深める機会とします。学外の方も参加いただけます。ふるってご参加ください。

テーマ

大学における根拠に基づく教学改善とIR

講演者(同時通訳付)

デイビッド・ドウエル氏

(米国・カリフォルニア州立大学ロングビーチ校、戦略的計画担当副学長)

トッド・ウォーカー氏

(豪州・バララット大学、学習・質保証担当副学長)

日時

2012年1月27日(金) 午後1時30分～3時40分(受付開始:午後1時から)

場所

立命館大学朱雀キャンパス 1F 多目的ホール

アクセス: http://www.ritsumeijp/accessmap/accessmap_suzaku_j.html

申込方法

参加される方は、2012年1月25日(水)までに、fd71cer@st.ritsumeij.ac.jpまで、タイトル「1/27 教学実践フォーラム」として、ご所属・お名前・懇親会のご出席有無をご連絡ください。(事前申込なしの当日参加も可能です) URL: <http://www.ritsumeij.ac.jp/acd/ac/itl/teacher/event/20110127/Rseminor.pdf>

お問合せ: 教育開発支援課 川本・青山 (075-465-8304)